

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

<史料館だより>

目 次

- ◇ 深江神楽町への回想 団野 清 2
- ◇ 『本庄村史 地理編・民俗編』完成! 7
- ◇ トライやる・ウィークと史料館 水口千里 7
- ◇ 史料館日誌抄・資料寄贈者ご芳名 8

2005. 3. 31
NO. 33



完成した

『本庄村史 地理編・民俗編』▶

神戸深江生活文化史料館

深江神楽町への回想

団野 清

はじめに

私は大正一一年（一九二二）深江神楽町に生まれ、昭和三八年（一九六三）転居するまでの四〇年間を当地で過ごしました。この間の少年時代（昭和五〇一五年）における思い出を、七〇数年前の記憶をたどりながら記して見たいと思います。

八〇才を過ぎた今でも当時の思い出は鮮明で、私の少年期は、大正から昭和初期にかけての不景気から漸く脱却し、社会的にも「昭和の青春時代」と言われた、明るい時代でした。

◆当時の景観と地域の佇まい

深江神楽町（現在の深江南町一丁目）は、正式には兵庫県武庫郡本庄村深江宇神楽新田と呼ばれ、北は旧国道（西国街道→浜街道→国道四三号線）、東は傍示川（昔屋との境界線）、西は津知川、南は海岸線に囲まれた東西約二五〇^{メートル}、南北五〇〇^{メートル}の区域を指す。東西の両水路は、現在前者は暗渠となり、後者は埋められ、昔の面影を偲ぶことはできない。北側の国道は、昭和二年（一九二七）に国道二号線が完成したため、当時は旧国道と呼ばれ、馬車や牛車が行き交う昔の街遺筋の面影を残していた。南側の海岸線には傍示川の西側と津知川の両袖は少しばかりの砂浜が、津知川の西側には、先端にマイル・ポスト（船舶の速力試験用標柱）の立った短い突堤が延びていた。砂浜に挟まれた箇所には宅地の石垣が築かれ、波打ち

際には消波用の捨石が置かれ、砂浜は無かった。

北側の東地域は、鬱蒼たる松林で、その高さは電柱より遙かに高く、樹齢百年を超える大木の天辺には五位鷲やカラス、トンビが巣を作り、昼なお暗しの様相を呈していた。住宅に近い道路との境界は、焼け棒杭に張られた鉄条網で仕切られ、春には野バラが絡まっ

て白い花を咲かせていた。西地区は町内唯一の田地と畑地で、旧国道北側の広々とした田園地帯の向こうに阪神電車の走るのが眺められた。

南側中央は住宅地で、海岸付近の松林には住居が点在しており、西側の一面に、「関西洋楽のふるさと深江文化村」と言われ、近年音楽愛好家にアピールしている地域がある。この地域については後ほど詳しく述べる。

住宅地域の北側には、住友本社の総理事を勤めた中田金吉氏と湯川寛吉氏が所有する三千坪にわたる広大な土地と邸宅が並んでいた。特に当時現職であった湯川氏は、私邸と道路を隔てた地域に、梅林と芝生に囲まれたテニスコートを所有され、早春にはグループの幹部を招いて梅見の園遊会や、初夏にはテニス愛好家を集めた交歓ゲームを催した。

湯川氏が亡くなられた告別式（昭和一〇年頃）で、白木の霊柩車に伴走する自家用車やタクシーが百台余りに及び、さすが大企業のとツブだと子供心に驚いた思い出がある。



津知川の河口に立つマイルポスト
神楽町に在住した画家福井市郎氏の画「戸屋浜風景」より（1935年頃）

住宅地区の中央は、現在の神楽町公園を中心として、一戸建ての平屋や二階建ての日本家屋（文化村を除く）が約五〇軒ばかり立ち並び、そのほとんどは、大阪や神戸の企業家、貿易商、地主等の私邸と、その勤め人の住居であった。そして各住居は殆んど庭付きで、石垣や瓦葺の板塀で囲まれ、すべてがお屋敷風の佇まいであった。特に、文化村東側の近江、嘉門、福田氏の邸宅は、門構えの奥に優雅な日本庭園のある別荘風の建物であった。南側の海岸線に近い地区には、一面の松林の中に中規模の住宅が点在していた。

以上、当時の神楽町の景観は、農漁業を中心とする深江地区とは趣の異なった町並みの風情が見受けられた。

◆当時の暮らし

昭和五ノ一五年（一九三〇）ノ一九四〇）間の我々庶民の生活はどのようなであったか、まず生活基盤となるインフラストラクチャーの状態から記してみる。

電力

当時この地区の電力は、明治三八年（一九〇五）に開通した阪神電鉄が供給しており、契約は常夜灯制とメートル制の二制度であった。常夜灯制は決められた時間帯（午後四ノ七時から翌日午前六ノ七時）に通電する定額料金制度で、用途はすべて電灯、家屋の間取りに応じた電球が会社から支給された。メートル制は、現在と同様のシステムで、契約電力に応じ積算電力計が表示する使用量に基づく料金制度であった。

電話

電話は、まだ一般に普及しておらず、オペレーターを呼び出す共電式で、所有者は限られていた。必要な時は付近の知人宅で借りるか、郵便局の公衆電話を使用していた。従って緊急連絡は専ら電報を利用した。当時は、全国ネットの電話回線は極めて少なく、遠距

離の通話は時間を要し、即時通話は夢のまた夢であった。しかし、昭和一〇年（一九三五）以降、電話局の整備が進み、漸次ダイヤル式が普及し便利になった。

上下水道

上水道は未整備で、上水は井戸水を使用、井戸は個人用と共同に分かれていた。汲み上げは、主に釣瓶、手押しポンプで、大邸宅では電動ポンプが設置されていた。この地区の水質は、芦屋川の伏流水を汲み上げるため極めて良質で、夏は冷たく冬は暖かく、誠においしい水が飲めた。しかし、阪神上水道の一環として当地に上水道が整備されたのは、比較的遅く戦後の昭和三〇年代である。

下水道も未整備で、生活排水は付近の水路へ放流するか、地面に浸透させる方法が採られた。そして下水道の整備は、戦後何時行われたかは不明。

都市ガス

都市ガスの導管が、敷設されたのは昭和一〇年代の初めで、それまでの竈、七輪、石油コンロからの生活からは、比較的早く開放されていった。

道路

旧国道をはじめ、周辺の道路はすべて未舗装の地道、道幅は狭く現在のの一車線以下で、一部を除いて現在と変わらない。当時の通行車両は殆ど荷車と自転車等のため、これで十分であったと考えられる。

交通機関

この当時の交通機関は、主に阪神電鉄（阪神電車と呼んでいた）が、通勤、通学や外出に利用されていた。最寄りの駅は芦屋で、駅まではすべて徒歩。タクシー（三ノ四台が芦屋の駅前にあった）は殆んど利用せず、ましてや、自家用車は皆無であった。

当時の阪神電車には、普通と急行（後に特急ができた）が走っていたが、乗客は、極めて少なく、普通は一ノ二両、急行と特急は二ノ三両連結で、現在と比べるとのんびりしていた。

幼稚園と学校

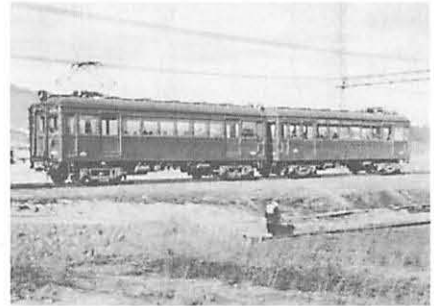
津知川の西にある酒造会社の北に、その名を「愛児園」と言うキリスト教系の小さな幼稚園があった。園児は約一〇〜一五名、中学の先生が助手の保母さんと共にオルガンを弾き児童教育に励んでおり、主に深江と神楽町の子供達が通園していた。

小学校は地区別制で、当校区は約二km隔てた本庄小学校で、児童は往復四kmを歩く通学を強いられた。従って当地域の児童の過半数は、地区制に該当しない御影にある付属小学校に通学していた。付属小学校は、阪神電車の御影駅北寄りにあった御影師範付属小学校（現在の神戸大学発達科学部付属住吉小学校）であった。入学は抽選制で、父兄に在校の実績があれば優先権があり、また地元御影在住の子弟も優先されたようであった。

児童が進学する中学校は、公立校では神戸市内に第一、二、三中



傍示川を通過した阪神電鉄神戸行き特急車
神楽町に在住した辻吉吉氏撮影（1935年）



津知川を通過する寸前の阪神電鉄神戸行き普通車
神楽町に在住した辻吉吉氏撮影（1936年）

学校があり、成績優秀者が主に進学した。私立では灘、甲陽、関学、神港、六甲中学等バラエティにとんでいた。

神楽町在住者の多くは、付属小学校から私立の灘、関学、甲陽中学等へのルートを歩んだ。

買い物

当地域には商店は全く無く、生活必需品のうち食料品は、津知川の西にある二軒の八百屋と魚屋と

一軒のかしわ屋（鶏肉屋）や芦屋にある肉屋（牛肉屋）から購入していた。これらの店屋からは、一〜五日間隔に「御用聞き」が自転車で注文を取りにまわり、注文すれば夕方には配達してくれた。また魚屋は、トコ箱に魚を入れて訪れ、その場で調理をしてくれた。このように当時は、すべて馴染みの商人との対面販売、支払いは全て一ヶ月又は半年毎の掛売りであった。従って現在の味気ないスーパーの買い物とは違って和気藹々の信用取引で、客の喜ぶサービスが行き届いていた。

特に魚貝類は、深江に魚市場があり大阪湾で獲れた新鮮なものが入手でき、名産の鯛や鰯は浜で聞こえていた網引きの音が終わって、しばらくすると、天秤棒を担いだ魚屋が「とれとれ」の魚を売りに回ってきた。

日用品は、すべて芦屋にあった甲陽市場や商店街へ買出しに行き、持ち帰りが出来なければ、配達してくれた。

大正一〇年（一九二一）に誕生した灘購買組合（現在のコープこうべ）が、昭和四年頃に国鉄の芦屋駅近くに支店を開設、当地域の



「愛児園」幼稚園の卒園写真（1929年）

会員の家へも白い自転車に乗った御用聞きが、食料品や日用雑貨の注文を取りに回り、配達するようになった。この組合には、主婦たちを対象とした現在のカルチャーセンター的活動を行う「芦屋家庭会」と言う交流会があり、当時の生活文化の向上に一役買っていた。その内容は、今日のような余暇を楽しむ社交的、趣味的な集まりでなく、生活に密着した和裁、洋裁、編み物、料理等を主体に活花、手芸、社会見学などを加えた実用的なものであった。

◆文化村について

大正一二年（一九二三）、深江の開業医坂口磊石氏が、神楽町の西側、津知川に沿う白己の所有地二千坪に在日外国人を対象とする理想的な住宅団地を計画したのが文化村の始まりである。

この計画を具現された設計者は、米国の宣教師で建築家のウイリアム・メリル・ヴォーリーズ氏（メンソレータムを輸入した近江兄弟社を創立、関西学院、神戸女学院、大丸百貨店、神戸ユニオン教会等を設計）の弟子である吉村清太郎氏（前述の幼稚園の東に自ら設計した洋館に住む）であった。この両氏の構想に基づく団地は、

中央に四〇〇坪の共有地を中心に、周囲に個性ある洋風家屋（当時は西洋館と呼んでいた）一三棟が並んでいた。殆どは、総二階建ての木造モルタル造りで、暖炉の煙突が突き出た日本瓦の屋根に、白い格子窓を配したハイカラな建物であった。各家の玄関周辺には、芝生を配した前庭があり、格子状の白い板扉にスイトピーや蔓バラが絡み、花壇にはチューリップやヒ



1961年代当時の文化村の空中写真（建設当時の姿を残す）
神楽町に在住した富永泰史氏撮影

ヤシンスや三色スミレ等、色とりどりの花が咲きほこっていた。

当時の住人は、日本人五世帯、外国人八世帯で、殆どは貿易関係の業務に従事していた。白系ロシア人の音楽家が在住したのは、大正から昭和初期で、昭和一〇年前後は余り見かけることはなかった。但し、日本人二世帯が住んでいた二軒を除き全てが借家であるため、その構成は毎年変わり、戦時色が濃くなった昭和十五年（一九四〇）以降外国人の姿はなく、空き家が目立つようになった。

戦後の世相の移り変わり、昭和の終わり（一九八九年）頃から都市の再開発が始まり、過去の遺産である優雅な西洋館は、次第に姿を消していった。そしてマンションや駐車場やミニ住宅に変貌する。現存する希少な西洋館の中で、現在も当時の姿を保っている、古沢邸と富永邸とベーカー邸につき紹介する。

古沢邸

神戸で貿易商を営む古沢平作氏は大正一四年（一九二五）、文化村の東北に新居を建てる際、設計を友人であるロシア人建築家ラディンスキーに依頼した。

急勾配の屋根をもった木造三階建て、南面には白い格子窓とペラング風サンルームを配し、鶯色の外壁に囲まれた建物は、前庭の芝生と、花の咲き乱れる花壇と共に絵のような美しさを保っていた。当家の、私達と同年輩のご子息は、病弱で常にメイドに付き添われ車椅子に乗っておられた。遊びに行くと両親ともども非常に喜ば



共有地を前にした文化村の西洋館
（1960年撮影）

れたのを記憶している。

富永邸

施主である富永初造氏が、神戸の貿易商である鈴木商店（現在の日商岩井）のシアトル支店から帰国した大正一三年（一九二四）、駐在員時代の経験を生かし、文化村の南西に自宅を設けた。

基本設計は、ポートランドの建築家ベイリー氏、施工は魚崎の棟梁吉田勝次郎であった。

緑の下見板を張り巡らした外壁に、暖炉の煙突と、大きな額縁で縁取られた白い格子窓をあしらい、屋根は寄棟式の総二階建てである。

この木造建築は、当時アメリカで多用されたバルーン・フレーム式構造で、後年三井ホームが売り出したツー・バイ・フォー方式の先駆けであった。

富永家には、幹太さん、泰史さん、昌子さんの兄妹がおられ、特に泰史さんとは同じ年齢層であるため、よく共に遊んだ「竹馬の友」だった。

ベーカー邸

ベーカー氏は、大阪で貿易商を営む傍ら高津中学（現在の高津高校）で英語の講師を務められた米国人で、当時既に日本国籍を取得していた。

邸宅は富永邸の西隣で、吉村氏が設計された総二階建ての洋館であった。残念ながら、この邸宅は戦後の再開発ブームで取り壊され、八軒ばかりのミニ住宅に様変わり



文化村の富永邸（左）と
ベーカー邸（右）（1960年撮影）

した。

ベーカー家には、マーガレットさん、フランシスさん、フィリップさん、リリーさんの姉弟がおられ、フランシスさん、フィリップさんと同年輩で、富永泰史さんと共に同じ「竹馬の友」であった。

現在文化村に在住のベーカー明子さんの邸宅は、吉村氏の設計した洋館で、かつてロシア人音楽家のエマヌエル・メッテル（大正一四年来日、大阪放送局・JOBK・交響楽団や京都大学交響楽団を指揮、朝比奈隆を育てた）氏が住んだ洋館である。

◆おわりに

この古き良き時代を背景にした回想録を記すに及び、私の拙文に花を添える貴重な当時の資料を快く提供して下さい下さった方々に先ずはお礼申し上げます。特に富永家の喜代子様、泰史様には深甚の謝意を捧げる次第です。

以上

参考資料

- 富永泰史「大空野郎一代記」パンリサーチ 一九八六年
- 小野高裕「芦屋文化村物語」一九九四年
- 辻圭吉「阪神間鉄道回顧録」（写真集）ないねん出版 一九九四年
- 山形政昭「関西のすまい芦屋文化村」
- 本庄村史編纂委員会「本庄村史 地理編・民俗編」二〇〇四年

『本庄村史

地理編・民俗編』完成！

このたび、『本庄村史 地理編・民俗編』（平成一六年七月三十一日発行）が完成しました。昭和一七年（一九四二）の最初の構想から、実に六二年ぶりの発刊となります（発刊の経緯は本誌三二号掲載の当館副館長の文章を参照）。

本書は、B5版・五四〇ページの大作で、とりわけ、江戸時代から地元の産業として栄え今では廃絶してしまった「漁業」に関する記述は大変貴重な内容です。一冊三千円で史料館などで購入できません。また、現在、残る『本庄村史 歴史編』出版に向けて鋭意努力中です。



2004年10月2日発行

神戸新聞（朝刊）より

トライやる・ウィークと史料館

——本庄中学校の生徒を受け入れて——

史料館研究員 水口千里

今年（平成一六年度）も恒例の「トライやる・ウィーク」がこなわれ、史料館でも毎年機会を提供しているが、今回は六月一〇日（木）と一一日（金）に本庄中学校の岡田涼平君と西村将君が史料館の業務を体験することになった。

初日は、未整理資料の登録作業をおこなった。昭和五〇年代のLP盤、電気トースター、保温ポット、アルミ製の弁当箱が対象資料だ。一点ずつデジタルカメラで撮影し簡単な計測をおこなったあと、調査カードを作成していく。レコードは曲名もすべて記入するというかなり手間のかかる作業である。レコードのミュージシャンのをご両親から聞いたことがあり関心が持てたようで、休み時間も返上して作業に没頭していた。

二日目は、季節展示コーナーに展示中の五月人形の撤収、収納のあと、「夏の風物詩」をテーマに実際に展示をおこなった。団扇、蠅捕り器、水鉄砲など、夏ならではの収蔵資料を使って、二人がプランニングした展示が完成した。そのほか、宛名シールの整理など事務的な作業もおこない、二人の史料館での体験は終了した。



レコードの調査カードを作成する二人

▶ 西村 将君



◀ 岡田涼平君

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

平成十六年三月以降

△平成十六年▽

- 3月23日 神戸老眼大学 (見学者 二六四名)
- 6月10日 トライやるウィーク・本庄中学校2年生2名を受入れ、
/ 11日 2日間に渡り史料館の業務を体験してもらう。
- 7月1日 東灘区役所新規採用職員研修(見学者 三五名)
- 8月30日 本庄小学校教員研修 (見学者 三五名)
- 9月18日 宝塚造形芸術大学 (見学者 四〇名)
- 10月28日 だいち小学校 三年生(見学者 一〇八名)
- 11月11日 西郷小学校 三年生(見学者 六三名)
- 11月24日 六甲アイランド小学校 三年生(見学者 一一四名)

△平成十七年▽

- 1月17日 福池小学校 三年生(見学者 一〇八名)
- 1月18日 六甲小学校 三年生(見学者 五八名)
- 1月19日 こうべ小学校 三年生(見学者 九一名)
- 1月20日 中央小学校 三年生(見学者 七二名)
- 1月21日 福住小学校 三年生(見学者 七九名)
- 本山南小学校 三年生(見学者 七三名)
- 1月24日 荒田小学校 三年生(見学者 二〇名)
- 1月25日 水木小学校 三年生(見学者 三六名)
- 1月26日 摩耶小学校 三年生(見学者 七三名)
- 1月27日 本庄小学校 三年生(見学者 一一二名)
- 1月28日 本山第三小学校 三年生(見学者 一〇八名)
- 1月31日 和田岬小学校 三年生(見学者 四五名)
- 2月1日 宮本小学校 三年生(見学者 二一名)
- 2月2日 御影小学校 三年生(見学者 七九名)

- 2月3日 真陽小学校 三年生(見学者 四〇名)
- 2月4日 灘小学校 三年生(見学者 四六名)
- 2月8日 住吉小学校 三年生(見学者 八五名)
- 2月9日 東灘小学校 三年生(見学者 一五一名)
- 2月17日 西灘小学校 三年生(見学者 八六名)
- 2月21日 なぎさ小学校 三年生(見学者 八六名)
- 2月22日 御影北小学校 三年生(見学者 一四六名)

資料寄贈者ご芳名 (敬称略・二〇〇四年四月) 以降

△黒田尚美▽支那事变従軍記章・羽二重の着物(二点) / △永田
勇雄▽写真(二点)

編集後記

最初の文章は、深江神楽町のなつかしい風景をかつてこの地にお住まいであった団野氏にまとめていただいたものです。
いちばんはじめの構想から実に六二年ぶり、また、史料館が発足してから二三年目にしてようやく『本庄村史 地理編・民俗編』を刊行することができました。現在もう一冊の『本庄村史 歴史編』の刊行に向け鋭意作業中です。もうしばらくお待ちください。
今年も恒例の小学校三年生の団体見学の受け入れを無事終えました。今年度も最多校記録を更新し、計二四校の子供たちが昔のくらしを学びました。

(T・M)

『生活文化史』 第33号 05・3・31

編集/道谷 卓

発行/神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-7
☎ 078-453-4980 (FAX兼用)